平城宮第３０１次発掘調査（東院地区南 二条条間路北側溝）現地説明会資料

1999年５月29日（土）

奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部

１．はじめに

平城宮は正方形ではなく東に張り出した部分があり、ここを奈良国立文化財研究所では東院地区とよんでいます。東院地区には『続日本紀』などの文献にみえる「東院」「東宮」といった施設の存在が想定されており、皇太子または天皇の宮殿として、また宴会、儀式、叙位などの場として用いられたと考えられています。神護景雲元（767）年に完成した「東院玉殿」、宝亀４（773）年に完成した「楊梅宮」もこの東院地区にあったとみられます。

これまでの発掘調査では、東院地区の東南隅にあたる塀で区画された一画において、大規模な園池とそれに伴う建物がみつかっており、東院地区の南西と西側部分には多数の建物群が確認されています。また宇奈多理神社のある丘陵上に中心的な建物が存在するとの想定もあります。「楊梅宮」などの位置はまだ明らかではありませんが、文献に「東院玉殿」での瑠璃瓦の使用がみえるとおり、東院地区では緑釉をほどこした華麗な瓦がみつかっています。

二条条間路は東院地区の南面大垣にそっている東西方向の道路です。東院地区の南面大垣の西端にある門（小子部門、のち的門）の前から東にのびて東大寺の西面中門につきあたる、京内でも重要な交通路の一つです。路面幅は時期によって変化しますが17mほどもあり、側溝だけで幅３ｍちかい大規模なものです。また二条条間路北側溝は当初の位置から南に３ｍほどずらして造り替えがおこなわれ、北寄りの溝（Ａ）と南寄りの溝（Ｂ）にそれぞれ２時期あることが明らかとなっています（Ａａ・Ａｂ・Ｂａ・Ｂｂの順）。

今回の調査地は東院地区の南面大垣中央に位置する、東院南門の正面に位置します。これまで、奈良国立文化財研究所では継続的に東院地区の調査･整備を行なってきました。今回の調査区は東側が120次、北側が245－１次調査区につながります。120次調査区では二条条間路北側溝と南面大垣の間の壇地に多数の建物を検出しています。また245－１次調査では東院南門を検出しており、３時期の変遷が明らかにされました。

今回の調査は二条条間路北側溝の整備にさきだち、二条条間路北側溝およびその周辺の状況を明らかにするために、およそ東西56ｍ、南北13ｍの範囲に約670㎡の調査区を設けました。調査は２月中旬よりはじめ、現在も継続中です。

２．検出した遺構

120次、245－１次調査で一部を検出していたものを含めて、多数の遺構が確認されました。主要な遺構としては以下のものがあります。二条条間路に関しては路面と北側溝、北側溝をまたいで門前面にかけられた橋が検出されました。壇地の部分では建物５棟と塀７条などが検出されました。また門の前面では南北方向に延びる溝を５条検出しました。

これらの遺構は切り合い関係や周辺の調査成果から大きくA～Cの３時期に区分され、それぞれ奈良時代初頭、前半、後半と考えられます。またA・C期は細分することが可能です。以下、時期を区分して説明します。

Ａ１期

東院の南を区画する塀はまだなく、二条条間路北側溝は北よりに位置する北側溝Ａａの段階です。南北方向の幅１ｍほどの溝14と溝16が掘られています。これらは北側の245－１次調査でも検出されており、門より南の延長部分を今回検出しました。溝14と溝16は溝の中心どうしが約７ｍの間隔で掘られており、南北方向の道路である東二坊坊間西小路の両側溝の延長上にあたる可能性があります。

Ａ２期

東院の南を区画する東西方向の掘立柱塀と１間の掘立柱の門（門Ａ）が築かれます。二条条間路北側溝は、わずかに南に位置をずらして北側溝Ａｂとなります。南北溝16も掘り直され溝17になります。溝17は二条条間路北側溝よりも深く掘られており、路面を横断して南に続いています。築地北側からの主要な排水路だったとみられます。また二条条間路の路面を南北に横断する溝２が造られます。溝２はふせた瓦を組合せた暗渠です。壇地には西端で南に折れ曲がる東西方向の溝９があり、溝２の延長上にあたります。

Ｂ期

門Aに替わって桁行２間、梁間１間の掘立柱の門Bが築かれ、大垣も掘立柱塀に替わって築地塀になります。また二条条間路北側溝は３ｍほど南に掘り直され、北側溝Ｂａになります。門の前面東側の溝14も掘り直されて溝13になり、門の北にある井戸や築地塀の雨落ち溝からの排水の役割をはたします。おなじく溝17も溝18に掘り直されています。壇地には、調査区東側に南妻柱筋をそろえた桁行３間、梁間２間の南北棟掘立柱建物（建物８、建物11）が２棟ならんで建てられ、その西に南北方向の塀７が造られます。またこれらの南側には東西方向の塀５も造られています。

Ｃ１期

調査区の北側では門Ｂに替わって、基壇をもつ礎石建ちの門Ｃが築かれます。門Ｃは桁行５間、梁間２間の門で、柱間は桁行の中央３間が13尺、両端間が10尺、梁間が10尺です。以前の調査で、この基壇は溝18と溝13を埋め立てて造られたことがわかっています。

調査区の西側では桁行６間、梁間２間の身舎に南庇がつく、柱掘形の一辺が1.5ｍほどもある大型の掘立柱建物1棟（建物26）を検出しました。身舎の柱間は桁行10尺、梁間８尺、庇の出は10尺で、建物の東西長は18ｍにもなります。柱穴の中には掘立柱の基礎となる幅24㎝ほどの礎板が残っており、４箇所の柱抜き取り穴の底で確認しています。身舎のひとまわり小さい柱穴は床束と考えられ、床張りの建物であったとみられます。またいくつかの柱抜き取り穴の埋土には檜皮が入っていました。建物26の南には土坑25があり、この中には檜皮が大量に捨てられています。このことから建物26は檜皮葺の格式の高い建物であること、建物26の解体時に檜皮を土坑25に捨てたことが知られます。建物26の東には目隠しの役割をはたすとみられる１間の塀23と塀24が建てられます。

調査区の東端では、東隣接地での120次調査で検出された東西棟で、桁行５間、梁間２間の身舎に南庇がつく建物４の西妻柱列の一部と、その南側にある塀３の西端となる柱穴を検出しました。また調査区の北東部分では、南北棟で桁行３間、梁間２間の建物10を検出しました。建物10の南には東西方向の塀６があります。

Ｃ２期

門は礎石建ちの門Ｃのままです。二条条間路北側溝は石の護岸をもつ北側溝Ｂｂに改修され

ます。側溝の両岸に人頭大の石を並べて側石とした状況が、調査区西側でよく残っていました。側石が残っていない部分では抜き取る際に掘られた溝と、側石が据え付けられていた痕跡の窪みが検出されました。門の前面にあたる部分の北側溝には、溝底に敷石がみられます。抜き取られた部分がかなりありますが、門の基壇の幅とあわせて東西23mにわたって人頭大の石を平らに敷き並べています。平城京の条坊側溝ではこのような溝底の敷石は例が無く、今回のものが初見です。

さらに、門の前面には北側溝をまたいで桁行６間、梁間１間という大型の橋がかけられます。梁間は11尺、桁行は6尺５寸です。橋の幅は門の中央３間ぶんとそろえられており、約12mあります。橋脚は一辺20cmほどの角柱を多く用いており、一つの柱穴に２本の柱が建てられている箇所もあります。

この時期には壕地の建物はすべて撤去されており、二条条間路からは築地塀と門、石で護岸して底石を貼った側溝と、それを渡る橋がみえるという状況でした。

その他の遺構

時期や性格は特定できませんが、二条条間路の路面に柱穴20と柱穴21を検出しました。これまで路面上における遺構の存在はあまり注目されてきませんでしたが、柱を立てる何らかの施設が存在することが明らかとなりました。またおなじく二条条間路の路面上に瓦を大量に投棄している土坑１があります。その他には壕地に塀12、塀15などがあります。

３．　出土遺物

二条条間路北側溝の埋土からサイコロ、魚形木製品が各１点ずつ出土しています。サイコロは先端を尖らせた四角い棒の各面に一から三までを記してあるもので、四にあたるべき面にはなにも書かれていません。魚形木製品は長さ11.6cm、幅3.0cmの板を魚形に加工して目、鱗などを表現しています。用途は不明です。ほかに木簡が数点出土しています。

また瓦は、壕地の部分で多く出土しており、奈良時代前半（平城Ⅱ期）の瓦が目立っています。これらは築地塀に使用された瓦の可能性があります。土器では「式」と記された墨書土器が１点見つかりました。金属製品では銅製の鈴が１点出土しています。

そのほかに奈良時代以前の遺物として、埴輪片が多数みられ、二条条間路北側溝の埋土には碧玉製の石釧が含まれていました。古墳に副葬される腕飾りで、この周辺に存在した古墳を平城宮の造営時に破壊したものと思われます。

４．今回の調査成果

① 壕地に多くの建物が密に建てられていた状況と、その変遷があきらかとなりました。これまでも120次調査などで壕地に多くの建物が存在することが知られていましたが、東院の南側をのぞく他の壕地ではこれほどの建物はみられず、東院の特殊性を示しています。

② 門の南西にあたる位置に大型掘立柱建物（建物26）を検出しました。遺構の切合い関係から石で護岸した北側溝Bbよりも前の時期にあたります。身舎の南にひろい庇が付き、屋根には檜皮が葺かれた格式の高い建物と見られ、周辺の小型の建物とは明らかにことなっています。壕地では最大級の建物で、門のすぐ脇にあることから特別な機能を持っていたと考えられます。奈良時代後半の東院は、天皇が宴を開いたり、また玉殿とよばれる宮殿を造るなど、重要な場所でした。大型建物は東院のこうした性格と関連するものと思われます。東院南門から出入りする人物を迎える際に控えた場所などという想定が可能でしょう。

③二条条間路北側溝のうち最も新しい北側溝Bbでは、門の前面部分の溝底に敷石が施されていたことが明らかになりました。門の基壇前面にあたり、東西23mにおよんでいます。これまでも北側溝は調査されていますが、このような状況は知られていませんでした。また石をもちいた護岸の状況も解明されました。東院地区の南面部分全体を石で護岸していたと見られます。平城京のほかの側溝は多くが素掘りで、石の護岸があっても部分的です。東院南側の側溝だけが石で護岸され、さらに門の前面のみ溝底に石を並べた特殊な状況であったといえます。この段階は宝亀年間以降の「楊梅宮」の時期に相当するとみられ、東院地区の南面にふさわしい格式の高い造りにしたものと考えられます。

５．おわりに

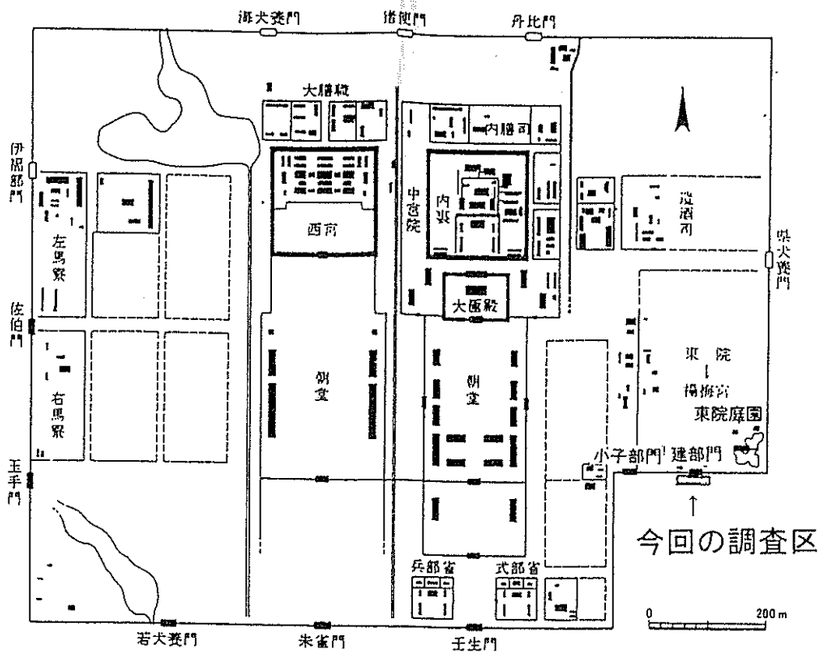
以上で簡単に述べてきたように、今回の調査では壕地を中心に多数の遺構を検出し、その変遷をあきらかにしました。門の脇には大型の格式の高い建物が建てられていました。また東院地区には宝亀年間に「楊梅宮」が造られましたが、二条条間路北側溝は奈良時代末には石で護岸され、とくに門の前面は敷石を施し大型の橋をかけて、「楊梅宮」のある東院地区中央の門の正面にふさわしい景観になっていたことも明らかになりました。

とはいえ大型建物の用途、東院地区の性格の変化と門や溝の改築との関連など、解明すべき問題点も多々残っています。

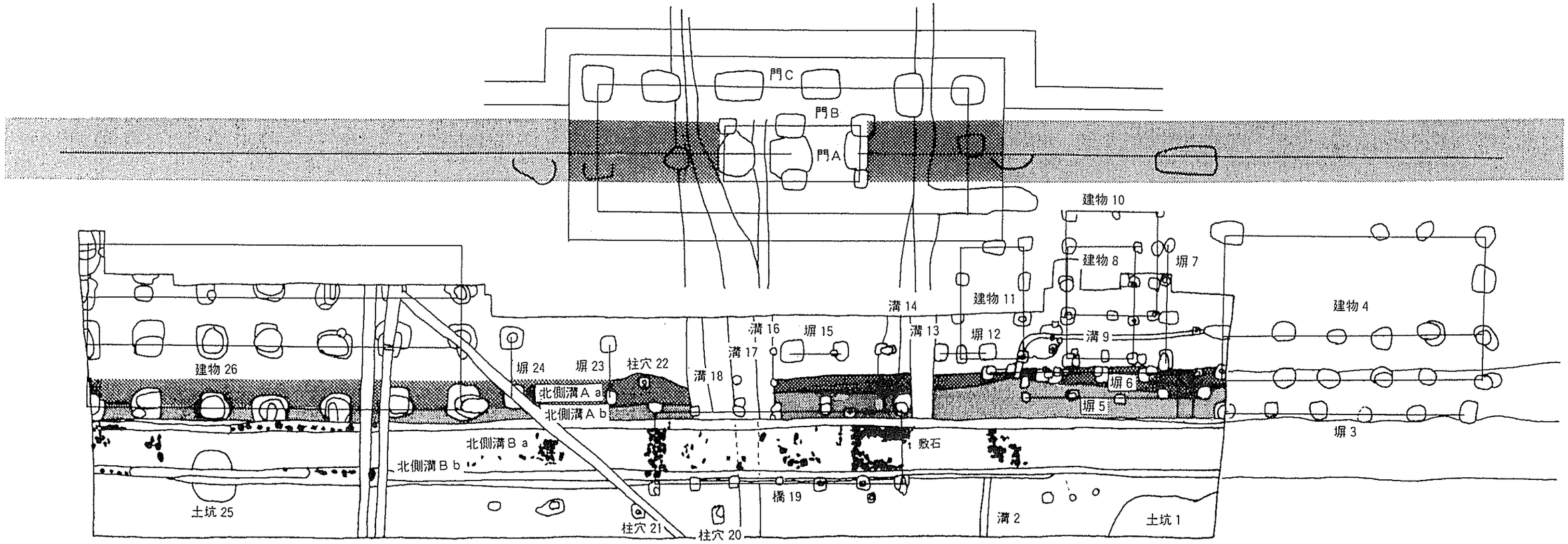
また文献史料では「建部門参向者交名」と名付けられた文書が正倉院文書にあり、右大臣ほか13人の高官が「建部門」に参向する（した）とみえます。これは『続日本紀』の記事と関連付けて考えられ、天平宝字元（757）年４月４日に右大臣、大納言ほかの高官が「建部門」に参向して、皇太子となった大炊王を迎えた際の記録であると考えられています（文献１）。今回の調査区の北側に建っていた東院南門は、文献に記載のある「建部門」に比定する説が有力であり（文献２）、皇太子となって東宮に入る大炊王を迎えた門にあたると考えられます。この説を受け入れれば、今回検出された遺構の中にもこのようなできごとと関係する遺構が含まれている可能性があります。門の前面の遺構がさまざまな儀式等とどのように関係するのかはまだ明らかではありません。

これらの問題については今後の調査の進展を待ちたいと思います。

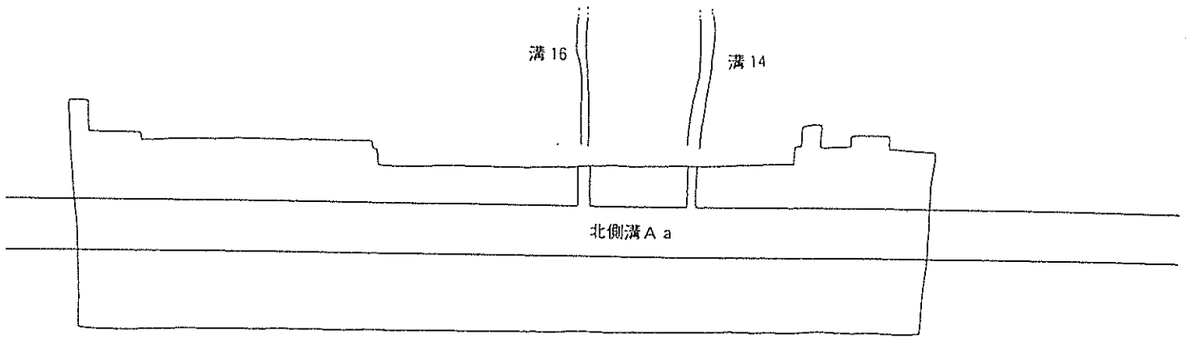
文献１　西本昌弘「建部門参向者交名をめぐる憶説」『続日本紀研究』295　1995
文献２　渡辺晃宏「平城宮東面宮城門号考―東院南門（ＳＢ16000）の発見によせて―」
虎尾俊哉編『律令国家の政務と儀礼』吉川弘文館 1995



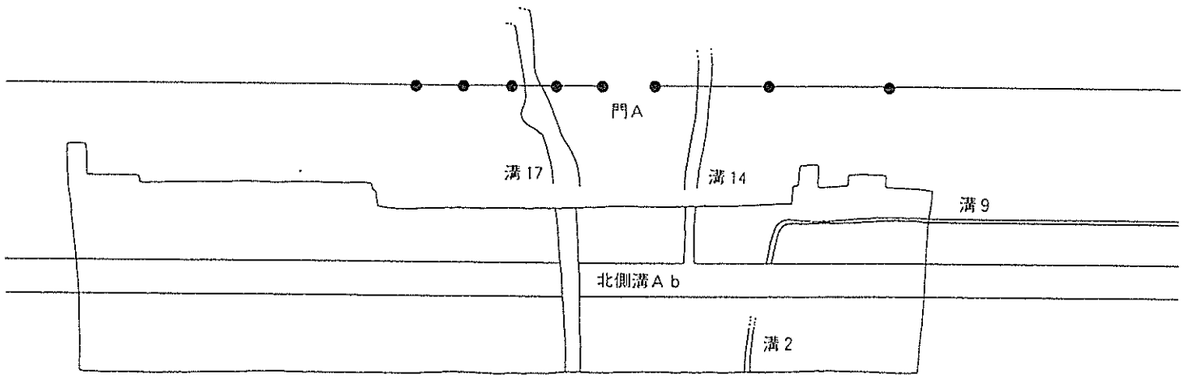
第１図　調査区位置図



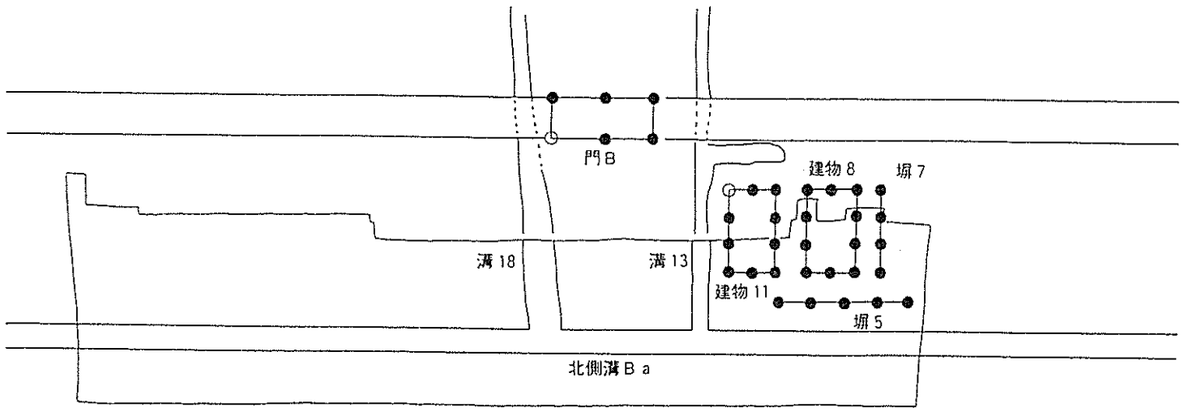
第２図　遺構図（１：200）



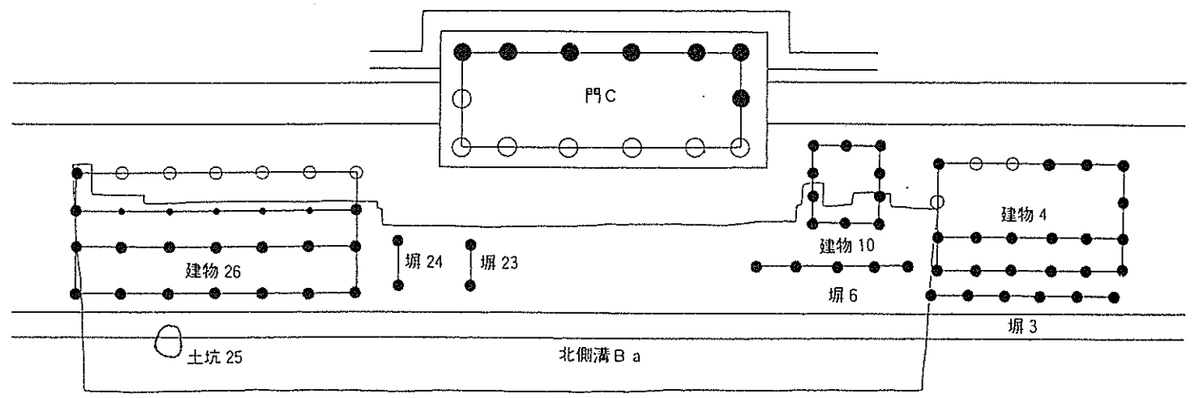
Ａ１期



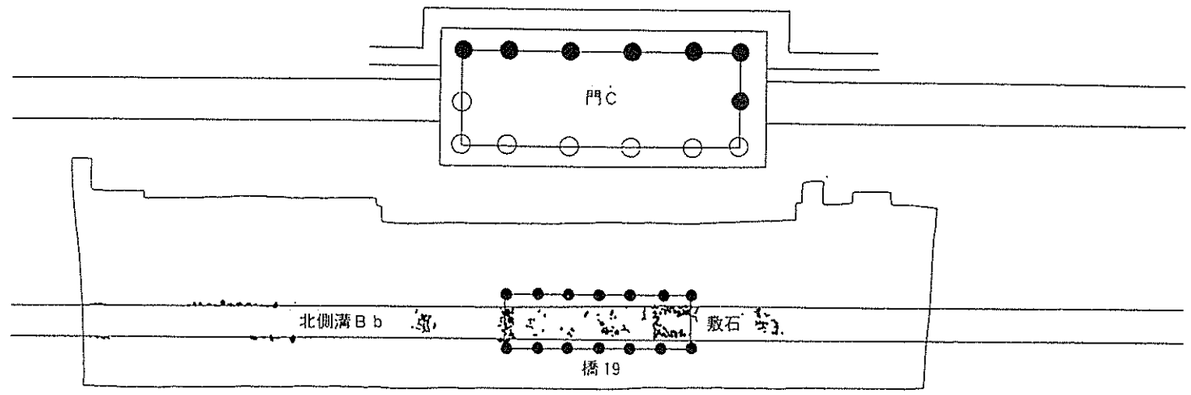
Ａ２期



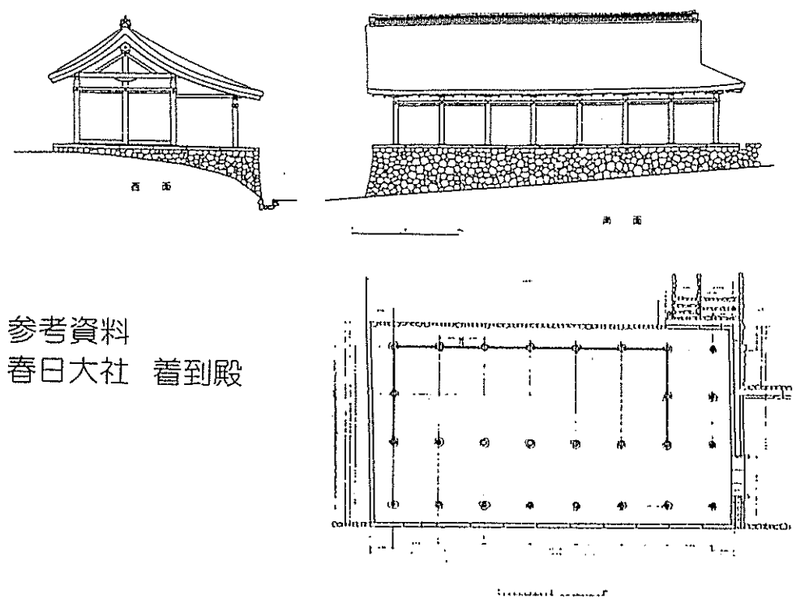
Ｂ期



Ｃ１期



Ｃ２期



参考資料
春日大社　着到殿

第３図　遺構変遷図